

## 聞き取り調査

福岡保育専攻学校第4回卒業生 尾崎恵子氏

# 児童教育科の隅の頭石として — 西南保姆学院・福岡保育専攻学校 —

実施日：2010年9月16日

実施場所：西南学院本館3階 談話室

語り手：尾崎恵子氏

### 尾崎恵子氏と西南保姆学院等の略歴

1940(昭和15)年	旧西南神学院跡地に西南保姆学院開設
1943(昭和18)年	西南保姆学院に入学
1944(昭和19)年	福岡保育専攻学校に校名変更
1945(昭和20)年	福岡保育専攻学校を卒業(第4回)
1950(昭和25)年	福岡保育専攻学校が西南学院に合併され、西南学院大学短期大学部児童教育科となる
1952(昭和27)年	舞鶴幼稚園教諭(主任)に就任
1960(昭和35)年	西南学院大学短期大学部児童教育科講師
1967(昭和42)年	舞鶴幼稚園教諭主事
1970(昭和45)年	西南学院大学短期大学部児童教育科助教授
1974(昭和49)年	4年制として大学文学部児童教育学科となる
1977(昭和52)年	舞鶴幼稚園園長に就任(延べ10年間)
1980(昭和55)年	西南学院大学児童教育学科教授
1996(平成8)年	西南学院大学定年退職
2005(平成17)年	西南学院大学人間科学部児童教育学科となる

### ◇西南保姆学院の開設まで

私は、福岡女学校、今の福岡女学院を卒業して、1943年に西南保姆学院に進みました。入学した時は西南保姆学院という名称でしたが、当局の指示で卒業時は

福岡保育専攻学校と校名が変わりました。保姆学院に行こうと思ったきっかけは、子どもたちの保育などに興味がありましたし、保姆学院の創立当時、兄がキリスト教学の教師で、姉も卒業していたこともあって自然な感じで進みました。

1 尾崎圭一(1905-1991)、西南学院バプテスト教会第7代牧師、神学部の教授で西南聖書学院(1961年-1975年まで)の初代院長。



▲福永先生の思い出を語る尾崎氏

校名からも分かるとおり保母学院はいわゆるトレーニングスクールでしたけど、決して保母の養成だけではなく、「ただ一つの願いは、日本をキリストにささげたいということである。そのためには、まず、家庭をキリストに、家庭を導く女性をキリストにささげる教育をしたい。キリストによる女子教育こそ唯一の中心目標である」というミセスC.K. ドージャー先生による熱い祈りの元、1940年に開設されました。以前から先生は、女子の神学伝道師というのを夢見て、もっと日本の家庭にキリスト教を伝道しようという考えを持っておられましたから、そこに力を入れられて、まずは幼稚園の教師を育成することに力を注がれました。

また、先生は、当初、北九州市の西南女学院構内に保母学院を開校しようとしたのですが、その土地がちょうど高台にあって工業地帯が見下ろせたため、軍事態勢が強まる時勢により当局の許可が下りなかったということで急遽、福岡の地行東町にあった旧西南神学院を仮校舎にして1940年4月に西日本唯一の保母養成

所として開校しました。そして翌年の6月、新築された鳥飼校舎に移転しました。

#### ◇保母学院の思い出

初めての新入生は7人<sup>2</sup>。先生方も専任7人で兼任講師や非常勤の先生を含めると10人以上だったので、学校というより塾のような感じでしたが、先生の人材には恵まれました。九大の医学部小児科の先駆者であった遠城寺宗徳先生もそのおひとりでした。私たちにはもったいないと思うようなすばらしい先生が来てくださって、空襲や勤労奉仕などいろんなことがあって戦争が激しくなったにもかかわらず勉強をさせてもらった記憶があります。

当時の授業は、午前中は保育の実習で、午後からは講義がありました。開校の目的が保母の養成、いわゆるトレーニングスクールだったから実際に現場で勉強することが大切でした。特に子どもの教育はいっしょに生活することが重要だから、そのようなカリキュラムが組まれていま

---

2 途中で1人退学したため卒業は6人。

した。勤労奉仕も一般の学生たちが行くような軍需工場ではなく、保姆学院の学生は農村や炭鉱の託児所に行って実習を行ったということがありましたね。

保姆学院は、大学4年間で勉強する内容とほぼ同じカリキュラムだったので時間がありませんよ。また、修業年限が2年と言っても戦争中だから空襲や勤労奉仕など勉強以外にいろいろなことがあります。だから何をすることもかえって集中ができたのは、この厳しさがあつたおかげかもしれませんね。当時は苦しかったこともあつたと思いますが、それでもそれだけの力を得たのではないのでしょうか。当時、保育科主任だった福永先生<sup>3</sup>は、いつも「神様があなた方を選んだのだから、あなた方は行って、必ず実を結びなさい」と聖書にあるとおり（ヨハネ15：16）、口をすっぱくしておっしゃっていて、学生はそれを旨として本当にしっかり学び、働いていました。ほとんどは専門の幼稚園や保育園、福祉施設などに、また牧師夫人として、定年まで働いています。そして多くの実を結んできています。

### ◇フレーベルの教育

保姆学院で一番核になるのは、もちろんミセスC.K. ドージャー先生の言われた「地の塩になれ、世の光になれ」という聖書の教えによっているわけですが、子どもたちへの教育という枝葉にどのよう

の中心はフレーベル<sup>4</sup>の教育だったと思います。フレーベルは幼児教育の思想家です。その教育思想が全国の保育界のベースになっていて、それが新しく入ってきた頃に教えてもらいました。そして福永先生は、保姆学院においてフレーベル教育をご自分の経験を元に理論と実践を踏まえて私たちに教えてくださったのです。それは卒業生全員がそのように思っていたと思います。

保姆学院で思い出すのは、鳥飼に新校舎が完成したとき、その献堂記念に作られた衝立<sup>ついで</sup>でした。それには「添え木して直く育てよ 稚児桜」と格調高い万葉調の字で書かれていて、当時、福岡在住の著名な書道家の大坪秋軒先生による作品でした。詠み人不詳のこの古句は、「神様が一人ひとりに備えてくださった生命は、自ら育つものであり、教育者はあくまでも添え木の役割に徹すること」という意味で、教育で一番大切な言葉だと思います。その衝立は、現在も人間科学部長室に設置されています。

### ◇「対象に聴け」

福永先生が来られて、保育のいろんなことを教えてくださった、一つ一つの言葉にキリストの精神がこめられているのが感じられました。子どもの教育に対して、福永先生自身の保育理念を表す言葉は数多くありますが、強烈な印象だったのは、「対象に聴け」という言葉でした。教育は一方主義ではないということです。

3 福永津義（1890-1968）は、長崎の活水女学校幼稚園師範科を卒業後、神戸に幼稚園を設立し、キリスト教教育の実践にあたっていたが、ミセスC.K. ドージャーの熱心な招きで保姆学院開校時に保育科主任として来福した。後に児童教育科長などを歴任。

4 フリードリッヒ・フレーベル（1782-1852）、ドイツの大教育者で、現代の幼稚園の基礎を作った。

子どものさまざまな心、思い、発達、そういうものを見聞きしながら予感をもって保育をしていかなければならないという意味です。だから自分で決めた内容で保育をするのではなく、「今日はこの子はどんなだろう」とか「どういう思いを持っているだろうか」などといろんなことを教師が敏感に感じ取って、そしてその子に合った保育をしていくこと、それが「対象に聴け」ということだと思えます。

それともう一つ、「愛児の自覚に立て」という言葉もよくおっしゃっていました。初めはみんな意味が分からなくて、子どもを愛するということかと思っていましたが、そうではないんですね。まず、自分が神様から愛されているという自覚を持つこと、そして子どもに接すれば、子どもを心から愛することができる。またその子どもは教師から受けた愛をもって成長していく。そういう保育をしてほしいという願いが込められた言葉だと思

います。このことは、自分と神様とのかかわりの中で、どんな時でも神様は愛してくださるということを感じて祈ることが保育者として大事であるということ福永先生は示唆してくださったと思います。

#### ◇卒業記念の劇とつるべ渡し

よく覚えているのが卒業記念の劇でした。これはもう保育専攻学校時代で終わってしまいましたが、演目は「ひろむし広蟲姫<sup>5</sup>」でした。奈良時代そういうお姫様がいて、孤児になった子どもを拾い上げて育てていく、という内容の劇です。とても印象的な劇でした。その当時は戦<sup>いくさ</sup>があればいつも子どもが犠牲になる時代でした。それと同じような時代背景が終戦後にもあって、戦災孤児や引揚孤児が学校の前に捨てられていたことがあり、保育専攻学校が収容して育てたということがありました。その後、それは早緑国児園<sup>6</sup>



▲先輩から後輩へ、荘厳な儀式として「つるべ渡し」が行われた。(中央は福永校長)

5 764年、藤原仲麻呂の乱の後、孤児83人を養子として育てたといわれる和氣広蟲のこと。これはわが国最初の孤児院の開設であると言われ、福祉事業・学校教育の先駆けとして子どもの守り神と敬われている。

と名付けられ、現在の早緑子供の園の原点といえます。「広蟲姫」の与えた影響は私たちにとっても大きいと思います。

それから、卒業式の大切な儀式として始められた「つるべ渡し」は、私が卒業した次の年から始まったんですよ。残念です（笑い）。現在も続いているようですが、これは大切な伝統です。福永先生が活水女学校の教員時代にも行われていた儀式と聞いています。活水というのは「活ける水」と書きますが、キリスト教教育の中に流れている水脈、「真理の水脈にふれて、その生命の水を汲むものとなるように」という精神を受け継いで、先輩から後輩に譲り渡していく。その象徴として「つるべ渡し」が行われたのです。卒業式には卒業生がたくさん来て、賛美歌を歌い、現在も続けられていることをうれしく思います。つるべには、卒業年度を記したカラーリボンがつけられています。

### ◇しのめ会

1942年、保母学院の第1回の卒業式のときに「しのめ会」という同窓会が発足しています。その名称もやはり福永先生が命名され、旧約聖書の詩篇の57篇の「箏よ、琴よ、覚めよ、我黎明<sup>しのめ</sup>をよび覚さん」（文語訳）にちなんだものです。小さくてこれからだけど、あの黎明は夜明けの光、新しい時代の始まりだと、明るく希望の学校として発展していくように卒業生もがんばりましょうという意味が込められています。ですから学校がどんな境遇にあっても希望と喜びと光を忘れないために、卒業生が互いに強い絆で

結び合っていこうと同窓会が組織されました。残念なことに年を経るにつれ少しずつ変わっていききましたけどね。6年前に久しぶりに西南で「しのめ会」を開催しました。みなさん喜んで約200人集まりました。卒業生は大変懐かしがって西南に帰って来たんですよ。保母学院、保育専攻学校、短大時代の話に花が咲き、とても楽しそうでした。その後は、大学のホームカミングデーといっしょに開催しています。なお関東しのめ会（支部）は現在も続いていることを感謝したいと思っています。

### ◇暖かいファミリー

西南保母学院というのは真に小さい学校でしたが、暖かいファミリーのような学校でした。困難の中にも、みんな寝食を共にして学校の中で生活をする。勉強もする。先生方も学校の部屋を借りて、家庭が大きくなった感じで、もう家族のようなものでした。ミセスC.K.ドージャー先生の一番の思いは、家庭を神様の愛で満たしたいという願いでしたので、このような形にも表れていましたね。キリスト教を日本の家庭に、あるいは学生に伝えることが一番でした。ですから学校がそのような形で発展していく、そういう姿を心の中で喜んでおられたと思います。

### ◇西南保母学院は隅の頭石

つきつめると西南保母学院とは何だったのかと聞かれたら、やはり「児童教育科の隅の頭石だった」と答えるでしょう。

6 1945年9月に孤児収容施設として県の認可を受けた。最初のうちは、保母学院の学生たちが交替で世話をしたが、1948年3月で廃止された。早緑子供の園の前身。

決して大きな学校ではないけれど、本当に隅に置かれた石だったと思います。その石は固くゆるがすことのできない石だったと思います。「さあ、この子等に生きようではないか」というフレーベルの言葉がありますが、まさに学生に呼びかけられているような感じで、今の学生たちにもしっかり頑張ってもらいたいと思います。愛児の自覚に立って子どもたち一人ひとりを大切に、持ち味を生かし、また、子どもたちによって我々も生

かされているということを感じ、使命感をもって保育者として立派に育ってほしいと思います。

それからミセス C. K. ドージャー先生がよく言われた、「あなたがたは地の塩であり、世の光であれ」という聖書の言葉は児童教育科にとって永遠であり、西南学院の建学の精神と共に心にとどめておいてほしいと思います。そして神と人に仕え、よき働き人として、よい生涯を送ってほしいと思います。